最新の理論、社会のニーズに対応した技術や思考。ゼミや研究室には学生の真剣なまなざしが満ちている。

理工学部・木村健司研究室
諸現象を点と線で解明「グラフ理論」生かす

木村健司研究室は、今年4月にスタートしたフレッシュな研究室だ。

コンピューターサイエンスが専門の丸岡章研究室（現特任教授）の学生2人と大学院生1人とともに研究に取り組んでいる。現役の院生のような雰囲気の「木村先生」を囲む研究室は、親しみやすさに満ちている。前職の東京理科大学時代から「落ち着いたくつろげる研究室にしたい」と心がけてきた。

木村助教の専門は数学の一分野である「グラフ理論」。

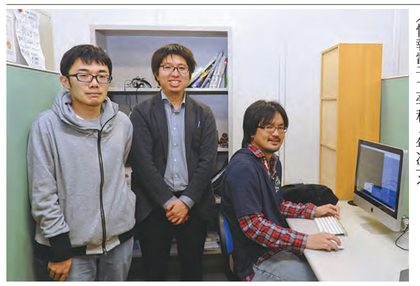
「グラフ理論」は、あらゆる現象の関係性を、点と線のつながりに着目して考察する。一例をあげると、A駅からB駅に向かうとき、パソコンやスマートフォンの経路検索システムで調べると、時間が早い経路や運賃が安い経路が即座に出てくる。この仕組みを支えているのが「グラフ理論」だ。出発駅、乗換駅、目的駅が点で、各点を結ぶ経路が線にあたる。

このように点と線で結びつけられるものすべてが研究対象となる。ネットワーク上のコミュニティー。戦国時代の同盟関係…。最適の結びつきを目指し、点と線の性質を考えることが研究のテーマだ。

「ものごとを論理的に考える力と自分の考えを数式に表す力が不可欠」（木村助教）。宇宙的な幅広い視野を備えることがポイントとなる。

研究室の菅原幸介さん（情報電子工学科4年次・宮城県石巻北高）は今、卒業研究に取り掛かっている。テーマはパズルを解く際の学習過程。「グラフ理論に通じるものがあると思います」と菅原さん。

木村助教は、授業では「情報システム概論」「プログラミング論」などを担当している。「礼儀正しくて素直な学生が多いですね。一人一人の顔が分かる少人数教育の良さが生かされていると思います」と話している。


▲ 和やかな雰囲気の研究室。左から菅原さん、木村助教、清野信介さん（院理工修2）

経営学部・関口駿輔ゼミ
「4年間で1400万円分の価値を身につけよう」

「4年間で1400万円分の価値を身につけよう」が経営学部・関口駿輔（公共選択、都市経済学、地方財政）ゼミの合言葉。金額は年間の学費を100万円、進学せずに就職していた場合の年収を250万円と仮定して計算した4年分の合計だ。

「そのうち1000万円は他の選択肢を選んでいたら得られていたはずの利益、経済用語でいう機会費用です。かけたお金に見合う勉強をしないと親に申し訳ありません」と関口助教は話す。

独自の価値を身につけるために学ぶスキルはGIS（地理情報システム）、ビッグデータの統計解析、合理的思考、シミュレーションの4つ。GISは地図データと種々の情報をコンピューター上で結合させてデータに付加価値をつけ、多角的な分析に役立てるもの。スーパーの商圏調査などにも使われる。「地理や土木系の学科で教えるのが一般的で、経営学部で学べるのは僕の知る限り東北では本学だけです」（関口助教）。

ゼミ長の石森誠也さん（宮城県石巻高）らゼミ生は2年次生5人。昨年12月にスタートした。いずれも「ここでしか学べないGISに魅力を感じた」（石川のぞみさん・同石巻女子商業高）とスキル習得に意欲を燃やす。

目標は関口助教の属する「公共選択学会」の「学生の集い」（11月、神奈川県）に向けた論文作成だ。テーマは「日本全体の人口減少が進む中で、東京の一極集中をどう捉えたらよいか」。7月中の第1稿完成を目指している。

「賛成か反対か自分の意見を持つのは、テーマが示す内容をじっくり調べてから」と話す細川義人さん（同塩釜高）に関口助教は笑顔を向ける。

「中心市街地の活性化も倒産も、善しあしは客観的なデータで判断してほしいと教えてきた。みんなが本質を捉えられるようになってきてますね」

▲ 物腰柔らかな関口助教（右端）と論文作成に意欲満々のゼミ生

人間学部・照井孫久教授
身近な問題に置き換えて目指すは「石巻白熱教室」

物事は複雑に絡み合い、簡単に解決することは難しい。照井孫久教授（福祉サービス評価、福祉サービスリスクマネジメント）は、地域における福祉の意義を学び、その課題を検討する人間文化学科2年次の必修科目「地域福祉論」で現実の厳しさを説く。

「みんなが支え合って生きる社会をつくることはそう簡単ではないんです。現実の世界にはさまざまな意図や利害関係が渦巻いている。それを見極め、ネバー・ギブ・アップの精神で立ち向かう強さを身につけてほしいと考えています」

照井教授は今年度から本学に勤務。社会福祉士（ソーシャルワーカー）として長く高齢者や障がい者の困り事の解決にあたり、特別養護老人ホームで施設長を務めた経験も持つ。「地域福祉論」では自身の実践に即した事例から話を進め、学生にわかりやすいと好評だ。

関あゆみさん（宮城県美田園高）の印象に残っているのは、自立を望んでで行動を起こしたある障がい者の話だ。両親との別居に始まり、念願のグループホームを開設したが後も、さまざまな「反対」に遭いながら、ホーム内にコミュニティー・レストランを設け地域に根を張った存在になる。「一つ解決してもまた次の問題が出てくる。それでも不可能を可能にする道はあるのだと心強くなりました」（関さん）

授業中、毎回ディスカッションの時間がある。受講生7人が持ち回りで司会役となり、テーマについてどう思ったか一人ずつ発言を促す。福祉の基礎理論や社会学、哲学など抽象的な話の後も、身近なテーマに切り替えて意見を述べ合うのは関さんも「刺激になって楽しい」と話す。

「単に相手の話を聞くだけでなく、真剣なディスカッションでもっともっと燃えたぎらせたい」と照井教授。「石巻白熱教室」を思い描いている。

▲ 照井教授（左から4人目）は討論が思考を深めると学生に呼びかける

被災地の子供たちに遊び場を提供
支援サークル「ひだまり」

本学キャンパスで毎月1回開催している「にこにこプレーパーク」を運営する「石巻専修大学支援サークルひだまり」が4月に誕生した。

「にこにこプレーパーク」は被災地の子供たちに遊び場を提供しようと、経営学部・山崎泰央ゼミの学生が2012年度から取り組んでいる活動で、「住友商事東日本再生ユースチャレンジ・プログラム」の助成対象に選ばれた。「ひだまり」は、この活動の継続とステップアップを目的にしている。

メンバーは粟野洋輔代表（経営3・宮城県石巻商業高）ら、山崎ゼミでの活動してきた2～4年次生8人と1年次生21人。

粟野代表は「人間学部の学生がたくさん会しました。今までの活動に、教育や地域研究を学ぶ人間学部生が加わったことで、新しい試みにチャレンジしたい」と意気込みを語る。

▶ 粟野代表を中心に熱心に意見を交わす

「子供たちのニーズに合わせた活動をしよう」と、従来の活動に加え、新たな企画も計画中。週1回のミーティングでは、安全を基本に楽しめるイベントにしようと、熱心に意見を交わし、さまざまな角度から検討を加えている。

保育士志望の宗像遼さん（人間1・福島県郡山高）は「5月の『にこにこプレーパーク』から参加しています。子供たちと接する時は言葉を選んで接するなど、保育士実習を控え、貴重な経験となりました」と活動の成果を話す。

粟野代表は「石巻の子供たちに何かしてあげたいという思いで活動していますが、自分たちの成長の場にもなっています。今後は市内の高校生にも参加してもらい、石巻のために続けていきたい」と夢は大きい。

魅力増すキャンパスライフ

構内にワンルームタイプの学生寮
「ユニバーシティハウス」来春誕生

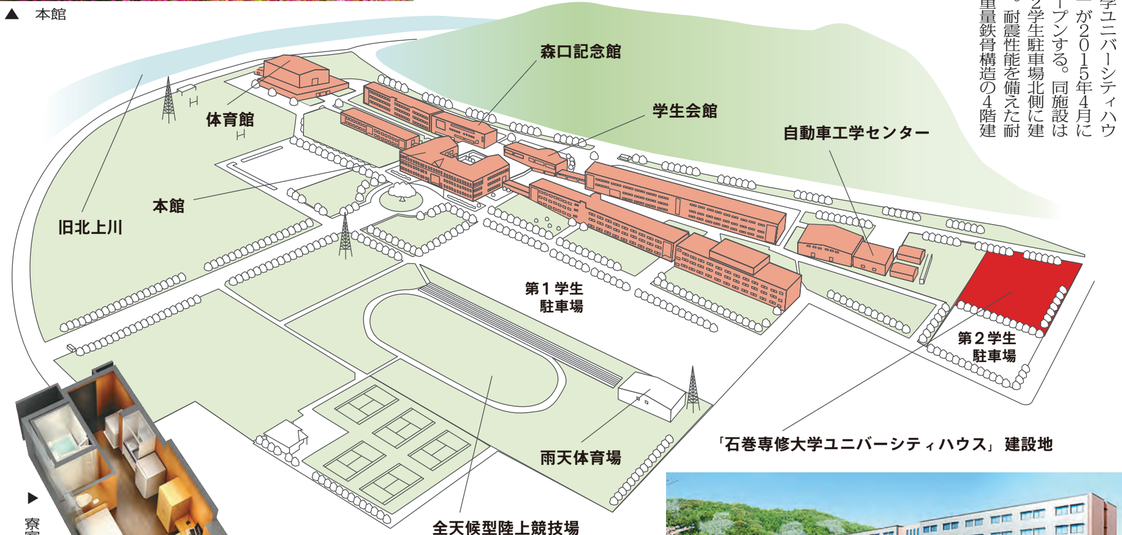
3学部7学科を擁する石巻専修大学は、キャンパス周辺に山や川が間近に広がり、自然豊かな環境が学生をのびやかに育む。学生生活を彩るサークルは体育会系、文化会系、学生会など合わせて51団体あり、陸上部では女子駅伝の強化が発表され話題を集める。来年4月にはキャンパス内にワンルームタイプの学生寮もオープンし、利便性が大幅に向上する。

学生たちの居住空間の充実を図るため、キャンパス敷地内に「石巻専修大学ユニバーシティハウス」が2015年4月にオープンする。同施設は第2学生駐車場北側に建設。耐震性能を備えた耐火重量鉄骨構造の4階建て、延べ面積約4150平方㍍の住居棟と、450平方㍍の食堂棟からなる。施設の特徴は次のとおり。

▽災害対策、耐震性能を備えた安心・安全のキャンパスライフ
▽ハイクオリティーな都市型の居住空間
▽レストラン、カフェ、ラウンジなどの充実した共有スペース
▽安全型集中管理システムで24時間トータルセキュリティー

▲ 本館

キャンパスマップ



▶ 寮室（イメージ）

▲ 完成予想図

住居棟

寮室は個室のワンルームタイプ（1K洋室）で、女子50室、男子100室（ゲストルーム3室うち1室はバリアフリー）の計153室。バス・トイレ付き。各種専有設備が備え付けられているほか、高速インターネット回線（LAN）も引かれている。また、共有施設としてラウンジ、コインランドリー、宅配BOXも設置される。

【主な設備】机／イス／ベッド／ユニットバス／温水洗浄便座／シューズケース／収納／1Hミニキッチン／エアコン

朝・夕の2食付（土、日、祝日等は除く）で、寮費は6万5000円（月額）。

管理人が常駐し、学生が安心して生活できる環境を提供する。

食堂棟

入居者以外も利用できる開放感あふれる広いレストランは、日中はカフェとして運営される。焼きたてのパンを提供するパン工房も設けられ、一般市民にも開放する。

※入居者などの募集は今秋の予定。入居条件については現在検討中。決まり次第、随時ホームページなどでお知らせする。

▲ 開放感いっぱいのレストラン（イメージ）

陸上競技部
自己ベスト更新を目指し練習に励む

「全日本大学女子駅伝出場をかなえたい」

泉田 利治監督

女子駅伝チームの来年度新設が決まり、陸上競技部監督に就任した泉田利治氏は宮城県塩釜市出身。25年にわたり実業団の日本ケミコン女子陸上部の監督を務め、全国有数のチームに育て上げた名将で、2000年シドニー五輪1万㍍代表の高橋千恵美選手（宮城県若柳町＝現・栗原市＝出身）らを育成した。

「石巻は東日本大震災のダメージが大きい地域。皆さんに少しでも明るく、楽しい話題を発信したい。そのためにも、これまで第一線でやってきたのと同じように指導し、全力で選手を強くする。できるだけ早く全日本大学女子駅伝出場をかなえたい」と意欲を燃やす。

目下は東北各地の大会に出向き、今後の駅伝チームを担う選手の発掘にあたっている。

「陸上にはハードルを超える（記録を伸ばす）楽しさがある。それを味わうには努力が大切。ほめて伸びる子か厳しさがバネになるタイプか、選手の素質や個性を生かし〝原石〟から飛躍させたい」

女子駅伝の強化が最大の目標だが、「他の部員にも、一緒に練習する場面があるはず。トレーニングや体調の管理法など私の経験を全員に伝えたい」と話す。既に練習メニューの助言を受けた走り高跳びの白野雅寛さん（経営1・熊本県寺大玉名高）は「すごく参考になりました」と手ごたえを感じた様子だ。

真面目な話の雰囲気でジョークを繰り出し、選手の肩の力を抜く。同監督の朗らかな人柄は陸上界でも折り紙付き。

「努力、謙虚、感謝」の心を選手に根づかせ、陸上競技部の躍進を図る。

▲ 全天候型陸上競技場で練習に励む

陸上競技部は現在、部員数10人。キャンパス内の全天候型陸上競技場で毎日、汗を流している。短距離、長距離、フィールド競技など、種目は部員によって異なる。柴田晃良主将（理工3・秋田県湯沢翔北高）は「自己ベスト更新を目指し、みんな試行錯誤しながら練習に励んでいます」と話す。

5月からは長距離界で豊富な指導経験を持つ泉田利治氏が新監督に就任した。長距離（5000㍍）の選手である坂本直哉さん（理工2・岩手県宮古高）が「アドバイスをいただき記録アップにつなげたい」と話すように、部員たちも期待を抱いている。